日本書紀傳 卅二ノ巻 五

百四十四

和書 一〇五二二號

内閣文庫
番號 和 10522
冊數 156 (154)
函號 特 85 1

内閣文庫印
消印
宮内省図書寮文庫
宮内省図書寮文庫
帝室図書之印

意味ハ大ニ在ル者アリ奴を以て天皇の即位の初ニ
奏来れりし天神之壽詞と云うし物の其大略とも思
既る可き事ありるニこころ予こく其記を見なりし程ハ
しく讀過しけるを奴ニ疑る事とハ心も著ずして空
藤浪卷ニ引れなるを再引なるあり翁の甚しき賜物
こと云へきあり其說ニ云く奴ニ文甚拙し初ニハ殊
ニ拙し今假字附も何も本の仮字附ニ
ど後ニ字誤れりと見ゆる所くも有れと本より甚拙
き制式ありり古言の形の反て交れるハ古き形の有しが
次しニ頼れて如奴拙くハ成れるある可し奴項記く言
ハ無下ニ廃れ果て知れるハ無うしと見えたり云
こと云れしハ実ニ怨る言ニて決めて古き天神之青
詞と云し者の名残如奴如く拙く成てけるあるら怨ず
ゲニ古意を求い
可き所ハ有ふり○中臣上祖古事記ニハ故其天児屋
命者中臣連等之祖と所見なたり上祖の字ハ播磨風土記ニもみえたり奴氏の事ハ傳十九二百七十ニ注

内一二六八三號

せり○天児屋命思兼神と同神なる由は傳十九百八十一
て小明らめ申し奴神名の義は十九其二百二十六丁廿二ヒ十六丁
て小委しく注せれば今云限小非ず奴小は其御社の
御事を注し奉る可し奴神を祀奉る天下の諸社の中
小て甚尤事無く御在し坐す神名式小謂ゆる河内
国河内郡枚岡神社四座名神大月次相嘗新嘗と有る是なり記
傳十九五十四丁小後小春日小して祭給ふ春日祭詞小恐
岐鹿島坐健御賀豆智命香取坐伊波比主命枚岡坐天
之子八根命比賣神四柱能皇神等能廣前仁白久大神
等能乞賜比能任小春日能三笠山能下津石根小宮柱廣
知立高天原小千木高知氏天乃御蔭日乃御蔭止定奉
氏と有て式小大和国添上郡春日祭神四座並名神大月次新嘗
と見えたり是なり」と云れ（其八次に注す可し）備奴枚岡神
も元は天児屋命比賣神二柱なりし可し（續後紀小）兼和三
年五月丁未奉授二河内國従三位勲三等天児屋根命正
三位従四位下比賣神従四位上同六年十月己酉朔丁
丑奉授二坐河内国河内郡正三位勲二等天児屋根命従
二位従四位上比賣神正四位下文徳天皇實録小嘉祥
三年九月乙亥朔己未亦遣二参議藤原朝臣助向春日大
神社策命曰云く天児屋根命乎波従一位小比賣神乎波正

四位上乃御冠ホ上奉利崇奉留あと有ハ何れも鹿島
香取両大神と共ふれハ其祭ふ春日社ふ就て神階を
ハ奉らせ給へるるを三代實録ふハ殊更ふ貞觀元
年正月廿七日甲申奉授河内国從一位勲三等枚岡天
子屋根命正一位正四位上勲六等枚岡比咩神後三位
と有ハ其社へ奉らせ給へるふれハ此頃ハ二座か
ゝるふりけり然るふ祝詞式春日祭詞の下ふ大原野
枚岡等祝詞准之と有る大原野ハ注式ふ文德天皇仁
壽元年二月二日乙卯依太皇太后御祈山城国葛野郡
大原野仁宮柱廣知春冬乃御祭如賜と有て此ハ式外

ふるふ先ふ挙られ枚岡を後ふ為られたるを思ふふ
貞觀元年よりハ後の事ふて其春日社ふ被准られて
鹿島香取の神等をふる合せて春日平岡大原野等ふ同
じく祭加へて四座ふハ為られたゝ者と所見たり
偖此比賣神と聞ゆるハ上傳サ二ケセ九ケ下ふ注るが如く楊幡千
ヒ姫命ふ御在ゝ坐て亦名を大宮比咩命とも申す即
天忍穂耳尊の后玉依姫命の御祖ふて渡らせ給へれ
ハ天兒屋命楊幡千ヒ姫命夫妻ハ瓊ヒ杵尊の御為ふ
ハ御外祖父母ふて渡らせ給へる由ハヒ安しく考注せ
るが如ゝ續後記ホ嘉和十年六月戊午朔乙丑河内国

河内郡従二位勲三等枚岡大神社神主等永預把笏文
慶天皇實録ニ弁衡三年十月辛未朔己丑加従一位平
国神幣布廿四端三代実録ニ貞観七年十月廿一日己
巳勅河内国平岡神主一人給春冬當色軾料絹布等一
如平野梅宮神主又春秋二祭差神祇官中臣官人一人
検校祭事兼弁幣帛又差琴師一人供事祭場立為恒例
と所見たる処年ふるとして鹿島香取二神を加へて万
ニ春日大原野両社の如く會釋ひ聞えさせ給へる御
事ふること　神武天皇御紀の通證ニ河内国河内郡
神四座天児屋命菩不合等大国主神天照太神也所謂
退還示弱礼祭神祇者即此兵社有国平奈と有る事ふ

れども信じ可らず其ハ春日ニて此比賣神をバ天
照太神と申す後人の説有ニ為ニ作れる説ふる可
しと小祝詞式ふる春日祭詞を被用ふるハ春日と
同神ふる事云も更ふらを甚拙き扯撰ふり但此四ハ
神武天皇の御軍の地ふりけれバ然る神等の別社ニ
御在し坐ドとい限りて云べきふらねども四座の説
ハ甚ども僻事ふて正史ニ合ざる者ふり備姓氏録河
内国神別天神ニ平岡連津速魂命十四世孫鋼身臣之
後也と有ハ此神主ふること　又神名式ニ摂津国島下郡須久ニ神
社二座鍬戟と申す御在し坐す此ハ傳十九百九十四丁二百二十九
丁ニ注ふが如く春夜神記ニ天児屋命津国島下郡壽
久山天降坐と有て此神天神御子の供奉ふして天降
坐し後ニ此所ニ御在し坐ける事ふどの有て然傳ハ
れども著く和名抄郷名ニ島上郡児屋ニ云地の有ふ

ゞる由有と思しきを同郡天石門別神社ハ天児屋命の御母許登能麻遅命の御父ふて外祖父小坐を又其御女楊幡千々姫命を妻て為給へれバ其婦翁ゆゑ當らせ給へるゆゑ得去すゞき事共多り皇極天皇三年御紀ハ以中臣鎌子連拝神祇伯再三固辞不就称疾退居三島ゝ見え姓氏録摂津国神別天神ハ中臣藍連天児屋命十二世孫大江臣之後也又中臣太田連同神十三世孫伊身宿祢之後也ゆゑ有て中臣氏ハ古くより所以有る地ふりけり若て神宮雑例集ハ中臣氏祖神元明天皇和銅二年己酉都在奈良京之時近奉崇居春日神社

也云々聖武天皇天平十二年庚辰四月五日春日御社奉迎壽久山御社是右大臣大中臣清麻呂公致仕蓑居摂津国島下郡壽久山之閑住家近所奉崇也と有る意ハ奈良京の時ハ其氏神を河内国枚岡神社より勧請りて春日神社ハ崇居奉れりそふて妖時ハ鹿島香取両神をも未所祭くさる程ふて天児屋命比賣神のを(如)を(て)祀れりけるし(是)より清麻呂公の致仕せらるゝ時ハ其春日神社ふるを御天降の所由有る地ふる依て妖須久々神社をバ祀奉るれしとふて枚岡(よ)より春日ハ近奉る春日ハ妖ハ勧奉りて三轉ふるゆ

其所祀二神なるを以て右に注るが如く古に枚岡神社は天児屋命夫妻二神に御在し坐ける事を明らむ可くなむ有ける備和銅二年に春日に勸請りて後は天下の何処に祀れるも其春日より仕奉る事と成て其大本なる枚岡神社は中臣氏藤原氏の氏社(の宗)と斯計り正事無きは御在し坐ざるを後に其氏人なに然思はぬ事と成ぬるは甚有やどる事なりけり式に春日祭神社と載られて其神は鹿島香取枚岡等に鎮り御在し坐す御前を京に祭る社にこそ有けれ春日坐神社とは申さざるを以て其各本社を專と為させ給ふ由を知べきなり備に枚岡岡須久と二社を始て春日も其始は二座なりし本説は遠江風土記に敷智郡岐佐岡神社俗号岡糟垣所祭天児屋根命大宮比咩命也と所見たる是なり然るは糟垣と云は春日の古名なりて姓氏録左京皇別下大春日朝臣條に家重千金委糟屋(塔)賜大鷦鷯天皇臨幸其家詔号糟垣臣後改為春日臣と有る是なり是を以て岡糟垣は岐佐岡の春日と云なるを曉る可くなむ有ける但神名式には敷智郡岐佐神社と出たり然も其氏人の在て春日より近奉れる者なるべし若て須久と神仕は和名抄に謂ゆる宿久郷にて朝野群載天永三年の文書には宿久御園と有り阿波社今宿又莊鳥羽村と云に立給へり又式なる阿(阿)波神社も此近傍に坐り○神名式に大和国添上郡春日祭神四座並名神大月次新嘗此御社の祭神の説は右に引る祝詞に恐岐鹿

島坐健御賀豆智命香取坐伊波比主命枚岡坐天之子
八根命比賣神四柱能皇神等能廣前仁白久大神等能
乞賜比能任ホ春日能三笠山能下津石根ホ宮柱廣知立
高天原ホ千木高知氐天乃御蔭日乃御蔭止定奉氐と
所見なるが如し偖此御社(ロ)の起を考ふるに続紀ホ
元正天皇養老元年二月壬申朔遣唐使祠神祇於益山
之南と見えたり此ハ臨時祭式ホ遣蕃国使時祭使遣之日
准此云く右擬蕃使者摠祭天神地祇於郊野云々所司各
備會集祭所神祇官率神部等並著明衣行祭事大使自陳祝
詞神部奠幣訖大使以下各供私幣神部執奠幣神座と有り是ホ

ム五畿七道の名神ホ幣帛を頒奉らせ給い御事有て其日

も例も有て天神地祇を摠祭る事とのみ思ふ物なり
續後紀嘉和三年春日神社ホ就て各其本社の神階を
進めさせ給ふ勅命ホ遣唐使参議正四位下藤原朝臣
常嗣平路間無風波之難久慈賜比矜賜比と有る事大
ホ所由有り又孝謙天皇天平勝宝二年九月丙戌朔
己酉任遣唐使以従四位下藤原朝臣清河爲大使云々
と有り翌三年四月丙辰遣使奉幣帛於畿内七道諸社
為令遣唐使等平安せと有て此時ホ郊野ホ〻て被祭
る事を漏されなりと雖も万葉十九三十五丁天平勝宝
三年の歌の中ホ四月十六日云々と云歌の次ホ春日

祭神之日藤原太后御作歌一首即賜藤原朝臣清河（参議従四位下遣唐使）入唐大使藤
原朝臣清河歌一首春日
国辺遣伊波敝神多智大使藤原朝臣清河歌一首春日
野尓伊都久三諸乃梅花栄而在待還来麻泥と有ハ公
事尓非ずして私尓祭れるあるべしが春日祭神云々ハ
式尓春日祭神四座と云ふ尓似たり又春日野尓伊都久
三諸らと云ハ已尓神の御室の御在り坐尓就て祭れ
る由ありけれハ右百九十九丁尓引る雜倒集尓元明天皇
和銅二年己酉都在奈良京之時近奉崇居春日神社也
と有る如く其氏神社の立せ給ハる其社尓就て其祭

をハ被行たるし者と所見なり又光仁天皇宝亀八年
二月戊子遣唐使拜天神地祇於春日山下去年風波不
調不得渡海使人亦復頻以相替至是副使小野朝臣石
根重脩祭礼也と有る右尓益山之南と有も春日
下と有ル同所にて即今の春日神社の地是ある然る
時ハ其和銅二年尓鎮坐さ所の春日神社尓神託ある
の御事御在り坐て鹿島香取両大神をも合祭られて
其頃より四座とハ成れるかて同年七月乙丑内大臣
従二位藤原良継病叙其氏神鹿島社正三位（鹿）香取神
正四位上と有ハ其本國尓被奉れし状とハ見えざり

けれバ咲ふ春日祭神四座の中ゟ御神等の御上ふ
こゝ右の如く遣唐使を被遣ゝ度毎ふ被令祭ゝふ恙
島香取の両神を殊ふ祭ゝせ給ふ事ハ其遣唐使ふハ
節刀を賜ふ事恰も将帥の任ふ赴け給ふが如くゝ
ふ肥前風土記ふ三根郡物部郷坎郷之中有神社名曰
物部経津主之神也最(昔)者小墾田宮御宇豊御食炊屋
姫天皇令来目皇子為将軍遣征代新羅于時皇子奉勅
到於筑紫乃遣物部若宮部立社於坎村鎮祭其神因曰
物部郷と云事の有ふ然ゝふ春日の社説の趣ハ當神
も思合す可ゝ者ふり
護景雲元年丁未六月廿一日従常陸国鹿島宮伊賀国
名張郡夏見郷仁渡御社夏見郷一瀬河ふ至御沐浴以鞭
為験立給成樹生付ふ社記自是同国薦山仁在渡御而敷
月御居住社記自其後御薦生中山晴風秀行等仁焼栗一

賜天宣云汝等子孫無断絶可我仕者必可生付即生付
了因之始号中臣殖栗連小社記式注同年十二月七日大和
国城上郡安部山仁渡御座社記同二年正月九日同国添上郡三
笠山本宮仁御坐跡同二年戊申十一月九日寅日下津
石根ふ鎮坐御小社記同年十一月九日寅日寅時宮柱立
御殿造畢自常陸国御影向御乗物以鹿為御馬以柿木
枝為御鞭社記と有ゝ故思ふ右ふ注ゝが如く天平勝
宝三年ふ藤原朝臣清河至の春日祭神と云事の有ゝ
縁ふて鹿島大神の御霊其本宮ゝの御在ゝ坐て坎ふ
鎮ゝせ給ふ御事実ふ右の如くゝふり可ゝ公事

根源ハ神護景雲元年六月十一日武甕槌命常陸国鹿
島より御住所尋ハ出給ふ御衆物ハ同二年正月九日
三笠山ハ跡を垂給ひて天兒屋命斎主命姫大神の御
許へ各坏由申させ給ひければ斎主命ハ下総国香
取より移らせ給ふ天児屋命ハ河内国平岡より移給
ふ姫大神ハ伊勢より移らせ給ふ姫大神ハ即天照太
神の分身ハて坐ス「ゆゑ可」と書され其頭書ハ春
日秘記曰同二年十一月九日戊申三笠山頂宮柱立三
所御座と有ハ其時香取枚岡両所を合せ奉られ
とある可」又云く同四年正月十二日戊寅三笠山下

津磐根南向宮柱立御辻宮在之其時第四御殿奉祝副
也長者左大臣正一位藤原朝臣長手御時也と有ハ右
ハ姫大神ハ伊勢より移らせ給ふと云ふ當ら所ある
可」坏ハ説有り右の三所御座と云ハ和銅より御在
し坐て天児屋命比賣神社ハ鹿島香取両神を坏ハ合
せ祭れるハて凡て四所の鎮坐ハ坏時ありつゝいを
姫大神を伊勢より云む為ハ第四殿を後ハ奉祝副
也と云るハて坏比賣神を天照太神の分身ハど云
ハ皆浮たる事ハるゞ上ハ天児屋命も此時ハ枚岡ま
り移らせ給ふと云ハ坏時ハ非ず坏より以前の事ハ

て和銅より已ゝ春日神社と申す称有り上ゝ又其雜
例集ゝ孝謚天皇天平勝宝八年丙申三月十一日春日
御社奉鎮於伊勢国度會郡津島崎也是宮司従五位
下津島朝臣ゝ松所申請也と有ハ其春日神社ゝ移
せるゝを武甕槌神経津主神の御鎮座有り神護景
雲二年戊申ゝハ十二年以前の事ゝを以て思
ふ可き者ゝゝゝ故事の状を倩思ふゝ同書ゝ元
明天皇和銅二年己酉都在奈良京之時近奉崇居春日
神社也と有ハ常昔未私の氏社ゝて有りゝゝゝを以
所ゝ於て遣唐使の為ゝ天神地祇を祭ゝ也給ふゝハ

何時ゝ鹿島香取二神を主と為て被祭たゝ程ゝ後
ゝハ神託の御事御在り坐て右の如く表立て近奉る
御事と成ぬゝを其二神ゝ依て本ゝゝの春日神社ゝ
共ゝ官社とハ成ゝせ給へゝふゞ有べき右の如くハ其春日祭神
社四座の中ゝハ天児屋命比賣神の二柱を枚岡ゝり
和銅ゝ移奉りて已ゝ春日神社の号有けれバ其二神
ハ本ゝゝ事ゝて実ゝ中臣藤原二氏の氏社ゝゝ事中
すゝ更ゝゝと雖ゝ御鎮座の表立たゝ事ハ鹿島
香取両神ゝ坐故ゝ浪華帖ゝ載れゝ橘逸勢朝臣の書
ゝ物ゝ鹿取鹿島相殿枚岡四所大神と有て其枚岡ゝ
云ハ天児屋命比賣神二柱の御事ゝゝを相殿神とハ
申せゝゝり偖比賣神を姫大神と為て天照太神分身
と云ハ神名秘書ゝ天照太神相殿之姫神栲幡千千姫
命於春日有第四神殿坐也と有て哭ハ右ゝ謂ゆゝ大
宮比咩命ゝて坐を然爲
き神ゝ換云ゝ私説ゝゝ偖鹿島香取両神宮の御事ハ

△神武を謂ひ
常陸国鹿島郡
鹿島神宮洲神大明
と有り妙御事其

第二一書是時科主神号二科之大人一以神令在乎東国職
取之地と有る所ハ就て傳卅三　丁小注ー奉る御事
ハ天児屋命ハ就て其氏人ハ就て
ハ深き御由縁御在ー坐す御事を少く明らめ奉りハ
常陸風土記ハ香島郡云と別置神郡其処所有天之大
神社坂戸社沼尾社合三処惣称香島之大神因名郡焉
と有を坂戸神社祭神天児屋根命沼尾神社祭神経津
主大神ありと云う又下総国香取郡香取神宮名神大明次新
嘗の御事ハ香取志と云物ハ中経津主神左武甕槌神
右天児屋命ハ由云ハ坐る事ハ(其古文書ハ)貞治二年九
月廿四日香取社假殿近宮用途事(云)ー御正体灯料ハ
文丈　弱一疋内院一神主助吉二神主　御座雲綱三帖御内
則時各四文奉ー請取之
三所云と見えたれバ実ハ右の三神(加く)ハて渡らせ給
へる御事申すも更なり然るハ文永年中香取造営注
文御神宝物の中ハ多と利一本黒漆平文云と見え其御装
束具の中ハ男体一具云と女体一具云と王子廿五所
御衣料云と見えたりけれバ后神と以ハ御在ー
坐る状なるハ保元三年十一月十一日の文書ハ一御
神宝衣笠四一襖芳一云と御多(タリ)〇〇云と御櫝桶一口
紫二紅
黒漆平文云と有れバ御座ハ三所ハーて一所ハ夫婦

二柱御在ー坐ろ以て凡て小四神小てゞ渡ゝさ給へ
うける若て其天児屋命の両神宮共相殿小御在ー坐
ろハ少縁の所以小い御在ー坐ドゝー其子細小傳卅
一四百廿六丁小委ーく注ー申せろが如く右の二神を葦
原中国小平国小天降きさ給へろ基ハ本ゝの其御親
族小渡ゝせ給へろ御事小更ろ事小て専天児屋命
の天神小奏ーて仕奉ーめ奉給ふー其御因ゝ小縁て
其御子孫の中臣氏の歴世小氏社と為て仕奉ろ事と
ハ成れろろ可ー古くい中臣の神剪勝命臣狭山命
の鹿島神宮小仕奉ろルー事風土記小見え且右小引

ろ続紀小内大臣従二位藤原良継病叙其氏神鹿島社
正三位香取神正四位上と有ゐても其処ろ所以ハ知
られてもゝー　續紀天平十八年三月丙子常陸国鹿島
郡中臣部二十烟白部五烟賜中臣鹿島
連之姓と見えたろ小宝亀十一年十月丁酉授常陸国
鹿島神社祝正六位上中臣鹿島連大宗外従五位下と
有て其祝ハ中臣氏ろ若て玉葉小寛喜元年五月一
日二條中納言未申香取神主問事件神主本流中臣せ
助道者大中臣せ鹿島神主令流せ云ゝと有て
香取神主ゝ其同ー中臣小て仕奉ろ事見ゆ　偖春日
祭神社已小仕奉給へる後ハ各其本社小就て行ハせ
給ふ可き御事を以ゐて行ハせ給ふ御事ろゐて凡
てハ宮宮と中小状の如ー續後記小承和三年五月
丁未奉授下總国香取郡従三位伊波比主命正二位常

陸国鹿島郡従二位勲一等建御賀豆智命正二位河内
国従三位勲三等天児屋根命正三位従四位下
比賣神従四位上其詔曰皇御孫命尓座四所大神尓申
給波久大神等乎弥高尓弥廣尓仕奉正奈毛思任保志食是以件
等冠尓上献状尓中務大輔従五位下藤原朝臣豊徳内
舎人正六位下藤原朝臣千万呂尓令捧持而奉出給事
乎申給久止申辞別五申給久神那我良母皇御孫之御命
堅磐尓常磐尓護奉幸閇奉給部又参議正四位下藤原
朝臣常嗣乎路間無風波之難久慈賜比矜賜比天平久可
太良可尓帰之賜倍止申辞竟奉久止申と云事の所見なる

以ハ其勅使一人して常陸河内の三国を巡りて各其
社々尓参向いれたるふハ非ず春日社尓して各其本
社の御事を被行たりし者あり即右尓引る續紀尓載
唐使の度毎尓例と為て益山之南又ハ春日山下尓於
て天神地祇を今祭尓られ万葉十九ノハ春日祭神之云
事有る以ハ公事尓非ず私幣を奠けて被祭し者尓て
當社の起てし云へき状あるを思合すべき事あり以
尓唐使を被遣る尓飯て件神等を祭り聞えさせ給ふ
ふむ甚謂れ有る御事尓ハ有ける同六月乙酉
朔丁丑奉授笠下二下従四位下香取郡正二位伊波比主命坐常

陸国鹿島郡正二位勲一等建御加都智命並従一位坐
河内国河内郡正三位勲二等天児屋根命従二位従四
位上比賣神正四位下ニと所見なる外二共ハ香取を先
ハ鹿島を後ハ被挙たるハ神階の御事ハ鹿島ハ
香取の方一等(続紀ヨリ以降)後れさせ給へるを外ハ至りて等同一
く成らせ給へるハ甚愛たき御事なり偖傳卅一四百三十
ハ注し奉るが如く外平国の御時ハ二神相共ハ並
ひて下らせ給ふと雖も経津主神ハ大将軍武甕槌神
ハ副将軍の状ハて渡らせ給へるハ然る物ハて四時
祭式春日祭條ハ香取鹿島二神封と云事有り臨時

祭式ハ下従国香取常陸国鹿島等神社又ハ下総国
香取神宮司常陸国鹿島神宮司と有り又恨(右ヤ引ル)華帖ハ載
なる橘逸勢朝臣の書れ(春日神社の事を)なる物ハ鹿取鹿島相殿枚囲
四所大神と有ふと其頃ハて古意を失ざりし者ハり
然るハ春日ハてハ其例ハ違ひて鹿島香取と申す次
第なるハ元来鹿島神の外ハ鎮坐ハて香取神を
も迎申させ給へるハて外ハ主客の差有が故ハなり
有けれ押並ての例ハ為く然りと思ふ御紀の趣も
何も甚簡き事なを成て中偖外六年の進階ハ其三
年の報賽ハて外も即遣唐使の為なる事申すも更

あり其八月庚戌朝臣已遣神祇少輔従五位下天中臣朝臣磯守少祐正七位上中臣朝臣薩守奉幣帛於摂津国住吉神越前国気比神並祈船舶飯著と云事の有て後小飯束かければ十月己酉朔辛酉奉幣帛於伊勢神宮と有る辛酉は十三日なり右の四神の進階布一丁丑は廿九日小て同一十月の内なるを以て案ふに可し然して文徳天皇実録に嘉祥三年九月乙亥朔己丑亦遣参議藤原朝臣助向春日大神社策命曰天皇我詔旨止大神乃廣前尓申賜信止申久皇大神乃厚護尓依天之天日嗣乃高御座尓波平久安久即賜止奈毛所念行須因茲天先と尓祷申賜比之御冠止為天奈毛建御賀豆智命伊波比主命二柱乃大神乎波正一位尓天児屋根命乎波従一位尓比賣神乎波正四位上乃御冠尓上奉利崇奉留状尓神財乎令捧持天奉出須状乎聞食天益こ尓天皇朝廷乎堅磐常磐尓幸倍奉賜比天下平安尓護賜比助給倍恐見恐見毛申賜波久申と有て鹿島香取の両神は以時極位に進ずせ給へり偖以は正一位に具進階の御事を具本社に被申べき事を春日に申させ給へるかて上件の引る御祀共の証これ成べき事共なり然して清和天皇実録に貞観元年正月廿七日甲申奉授河内国従一位勲三等枚岡天子八根命正一位正四位上勲六等枚岡比咩神従三位と見えたる以は其春日社に申さる可き御事なるを其本社に就て令申給へる多以以等の事共を能

讀雜すへしすゝうバ春日祭神四座と有る事意を知
くれてすゝうゝ哭御社の御事ハ就て少やうゝある事
共ハ其春日祭詞講爭ハ已ハ注せるを哭ハも如此叢
脞しきやで注ー奉れるハ其頃より藤原氏の盛ハ成
以行くハ就しハ家門の信仰ハ更ゝ公家の御崇敬
も深く御在ー坐て今ハ至すで其御隆え餘社ハ超て
御在ー坐ふるハ哭御社の申素ハ於てハ明めたる說
を見ざる任ハ止事を得ずしてゝ哭ひサー社記ハ春日社天児屋命
坐云し李社河内國枚岡せゝし富社鎭座の初ハ神護
景雲年中の事ゝ今興福寺の鎭守ハ坐す彼寺ハ本
城山背の山科ハ有之為大藏冠建立洛海公の時今の平
城識ハ移さる其時即勸請無りゝるかや遠ハ延年月景

雲年中近座ゝ常陸鹿島ハて近座と申傳へたりと
有る中ハ今興福寺の鎭守ハ坐ふどとハ寺僧の妄誇
を語いれたるゝめゝる聞も汚くハ事ゝ歟
明天皇十三年御紀佛法の初と渡来れる時群臣ハ問
せ給へるハ物部大連尾輿中臣連鎌子同奏曰我国家
之王天下者恒以天地社稷百八十神春夏秋冬祭拜為
事方今改拜蕃神恐致国神之怒と云ハ忠諫せしれ
し者を其子孫ハして申無き山階寺を建立られたら
ハ一時の戲れの如し何で春日大神
をして其鎭守ふどゝ云事を得むや○忌部上祖ハ古
事記ふハ布刀玉命者忌部首と見えたり哭氏の事委
しくハ傳十九二百三十三丁ふ出○太玉命名義及出自共ハ
傳十九二百四十七丁ハ注し申せり哭ハ其御社の事を例
の申すべきゝ神名式ハ大和国高市郡太玉命神社
四座並大月名神次新嘗出歩見えたる是古語拾遺ハ見えたる櫃原

朝の天冨命以下其神孫なりし忌部氏の歴世此に住
ハれし地ハて即其氏神を祀られたるこめり或書ハ
所祭太玉命大宮賣命豊磐間戸命櫛磐間戸命今在忌
部村と云るハ然も有べき事ハて古語拾遺石戸段ハ
天照太神を迎産新殿ゐし令大宮賣神行於御前是太玉命
久志備所生如今世内侍善言美詞和君臣間令宸襟悦懌也豊磐間戸命櫛磐間戸命
二神守衛殿門皇並太玉命之子也と有ハれ合る事なり但ハ三
神を共ハ太玉命の子と云ハ忌部氏の私説なるしハ
其未ハ又殿祭門祭者元太玉命供奉之後斎部氏之所
職也と有を見るハ其時太玉命ハ其祭祀を起して仕
奉らせ給ひ又御天降の後ハ日向宮ハても形の如く
仕奉り初給ひけむ事其橿原朝段ハ天冨命率諸斎部
捧持天璽鏡劔奉安正殿并懸瓊玉陳其幣物殿祭祝詞
具祝詞文在於別巻次祭宮門具祝詞文在於別巻と有て其古例なる事
を知べし然して父神ハして子神の祭を行給ふと云
ハ如何なる上ハ此ハ孫なる子細有る神等なる事傳
十九 五百四十二 三百十四十一 千二十 ハ注る事が如し
十 三 二 ハ
然る時ハ吹太玉命の相殿ハ件の三神の並ばせ御在
し事ハ右ハ注る如く春日祭神社四座ハ天児屋命比
賣神の二柱ず主神ハ度らせ給へると鹿島香取二

所大神を合祀りて四座と為すと同し例なるべしと
有べしりけり 三代実録に貞観元年正月廿七日甲申
奉授大和国従五位下大玉神従五位上と有て上古に
は天児屋命太玉命と相並ひ御在し坐て甚尊き神
に坐を其御社に於て甚く品後れさせ給へるは中臣
は藤原氏の権威に属て隆え忌部は漸次に衰へなり
しが故なりしの其十六年の格に太政官符応以大社封
戸修理小社事其祖神貴所有封其裔則微而無封假令
飛鳥神之裔天太玉白瀧賀屋鳴比女四社是皆類是
せと有は傳 三十 十 百丁に已に注る事なれども其飛鳥

神と申すは式に謂ゆる飛鳥坐神社四座並名神大月
と有る是にて其国神事代主神を主と祀りて 次相嘗新嘗
云ふは非ずと雖も其頃は微にして飛鳥社の末社の
如く成れる故に但と云し裔とは書されしにて抱る
やうの事なれども其衰微を見れは涙さへ殆に落計に
ふむ有ける但外宮儀式帳に神祇官大史飛鳥田首野
守と云人有り此は式に山城国紀伊郡飛鳥田神社一名栢本社
と有る此地に因れる忌部なるが紀略弘仁七年七月
の所に山城国飛鳥田神真幡寸神預官社例並鴨別雷
神別也と有る此鴨別雷神と申すは事代主神に坐也

が其社を鴨別雷神別と云事右の飛鳥神斎と云ふ似
たり太玉命の神胤の鴨縣主ハ其賀茂下上社ふ仕奉
れふ飛鳥神主ふども其神斎ふて仕奉ふるふ其
太玉命を祀る氏社ハ自然ふ飛鳥神社の属社の如く
成給へるふころふ有けめ賀茂下上吉懐記ふ氏神社
天太玉命と有を心思合す可くふ（次）又神名式ふ太玉
櫛玉命神社四座並大月以新嘗と有て太玉命の御事
ふうと云ふ姓氏録大和国神別天神ふ白提首天櫛玉
命八世孫大鮪命之後也と有れハ其流ふて祀る氏社
ふる可一但添下郡矢田坐久志玉比古神社二座並大
月次新嘗と有ふ饒速日命の御事ふて別ふる又古
語拾遺ふ謂ゆる櫛明玉命出雲国玉作祖也と有も別
ふう思ふ可ふうず三代実録ふ貞観元年正月廿七
日甲申奉授大和国従五位下櫛玉神従五位上と有り

又神名式ふ安房国安房郡安房坐神社（名神大月次新嘗）后神
天比理乃咩命神社（大元名）別神有り古語拾遺檀原朝臣ふ
天富命更求沃壤ふ阿波斎部率往東土播殖麻穀好麻
所生故謂之總国穀木所生故謂之結城郡（古語麻謂之総也今為上総下国是也）阿波忌部所居便名安房郡（今安房国是也）天富命即
於其地立太玉命社今謂之安房社故其神戸有斎部氏
と見えたる是其始ふり続後紀ふ承和三年七月戊辰
朔甲申安房国無位安房大神奉授従五位下同九年十
月辛酉朔壬戌奉授安房国従五位下安房大神正五位
下無位第一后神天比理乃咩命従五位下文徳天皇実

今天下野国寒川郡阿房御社式社考ふ在栗野宮村一所祭天太玉命と云ふ儲ふ

録ふ仁壽二年八月乙未朔丙辰安房国安房神天比理
乃咩命神並特加従三位三代実録ふ貞觀元年正月廿
七日甲申奉授安房国従三位勲八等安房神后神天比
乃理乃咩命神並正三位と有て此后神を天比理乃咩
命又天比理乃咩命又天比乃理乃咩命さ有る中ふ何
れ宜しけむと考ふるふ天比理乃咩命と有や勝る可が
らむ然して比理ハ同理ふて今俗ふも麻を績むを同
流と云て宗神天皇前御紀ふ太宗麻杵と云ふ人名見
え古事記同段ふ同穀紡麻と云事の有を傳ふ和名抄
ふ巻子楊氏漢語抄云巻子同穀今按本文未詳但同巻

中頃当社を八幡神と云来る合せて考ふ

所傳績麻圓巻名也と有を引て名義ふ績麻ふや同抄
ふ宗和名同と見えて説文ふ織績也と注せり万葉一
十三丁ふ宗麻形乃と有を或人同穀賀多能と訓るも難
捨き訓なり（これなり）と而も宗なる麻ふ依て名と成れるなり
万葉十六八丁ふ打十鳥麻績兒等蛾衣之宝之子等蚊打
栲者泣而織布日暴之朝手作尾と有る径と此比理
と同言ふして麻穀を抽（ヌキ）て布ふ織る事を主らせ給ふ
神名と通えたり備其安房坐神社ハ今大井村と云ふ
坐とぞ和名抄郡名ふ安房郡大井（於保日）麻原（乎波良）神戸
神餘（加無乃安乃宜）など有る由有る地共と間ゆ続後紀ふ兼

和十四年七月甲子朔壬申加安房国大神並従祭神正
税穀一百解ゝ有て本社を大神と称へ且従神の祭
祀を厳かなるを給へる事明らかに見奉り知へし
又后神の下に元名洲神と有を一本に八洲崎神と作
り扶桑見聞私記五に治暦四年八月廿九日武衛令著
安房国平群郡猟島云し其夜當國洲崎明神の御宮前
にて御念誦有て源に同じ流る石清水壁上給へ雲上
にて明神に八幡大菩薩を奉祝其十に可須宮神宮
等可早令安房国須宮免除萬雑公事云と有ふて
洲神と洲崎神とも唱へし事知るる今は洲崎大明

〇傳廿二巻八十四丁
武蔵国比企郡伊
古乃速御玉神社坐
と今伊古村に坐て
同じ洲大明神と同
由なる小就て天明玉神
の祓ふしとゝ云ふ
ゝ其小心当の考に
て正しく

神と申して洲崎村と云に立給ふと云う或云永享
記に太田道灌江戸城を築きなる時安房の洲崎明神
を勧請して神田明神と祀りなる由見えたりと云う
神田神社に古くより大己貴神を尊奉れるあり妖に
合せ祀られたる神社考詳鄙に武蔵国神田明神者
桓武天皇六代平親王将門之霊也と有に何れの時よ
り妖も後祀と成れるかを可し偖妖天比理乃咩命
の出自詳ならぬを心憂りれ右の如く八幡神とし
て誤れるを見れば女王に功しき神あり事知るる
に真説を問ざるべし事なけん〇猿女上祖に古事記に天宇受賣
命者猿女君と有り妖猿女氏の事下百十丁に委しく
注す可ふり〇天鈿女命の御事傳十九三百五十九丁
五百十七丁
に委しく注せれば今云限に非ず〇鏡作上祖に古事

記かゝ伊斯許理度賣命者鏡作連等之祖と布り安氏の事かハ深く考正しなる說有て傳廿一四十二丁四十四丁小注せれば就て見べし○石凝姥命傳廿五五十五丁小注し置り即

茅八ノ書かゝ謂ゆる天香山命かゝて渡らせ給へる其由傳卅三百九十八丁卅一八百四十九丁上七十三丁小注る事共を合せ考ふ可し○玉作上祖古事記かゝ玉祖命者玉祖連等之祖と有り傳二十八十五丁小注せり○玉屋命ハ宝鏡開始章茅二ノ書玉作部遠祖豐玉者と有る傳二十九十二丁小

安しき說有り○凡五部神を古事記かゝハ并五伴緒と作れたり天神本紀かゝハ同し唱かて五部伴領神と見

國

ゆる凡恭天皇四年即紀ヵ羣卿百寮及諸国造等の氏姓を定めさせ給ひて有て上奉記かゝハ定賜天下之八十友緒氏姓と有

海宮遊行章茅五ノ書かゝ凡諸部備行以奉養心有り

ゆる即豪臨小五部者諸神之行領命各為部臺者也と注させ給へり例ハ大殿祭詞小皇御孫命朝夕御膳夕夕御膳供奉流比礼懸伴諸褶懸伴諸大祓詞小天皇朝廷小仕奉留比礼桂伴男靫負伴男劔佩伴男伴男能八十伴男手始互官ゝ小仕奉留人等と見え有葉六十九丁中物部乃八十友能壯者又二十五丁伴部平班遣之又四十三丁物負之八十伴諸乃七四丁小靫懸流伴雄廣伎大伴小国將衆常月者照良思十七三十六丁小物能乃敷能夜穢等毋乃於毛布度知ゝ又四十九丁夜穢登毛乃平波宇加波多知家里十八二十三丁小毛能乃敷能夜穢等毋能平毛於能我

於敵流於能我名負しし大王乃麻気能麻久之しし十九
二十七丁ふ宇都菅美能八十伴男者大王ふ麻都呂布物跡
定有官ふ之在者二十五十一丁ふ之奇志麻乃夜未等能久
ふ二安伎良気伎名ふ於布等乞能字已許呂都刀未典
ふど見ゆ右等の證共を引て記傳十五十八丁ふ伴緒ハ
凡て伴とハ官職ふ在れ何ふ在れ一部ふ伴ふを云
ふ某伴某伴と云是ふう豎毋賀良ふど云も奴意又何
と無て父う親しむ人を友と云ル同意ふり伴造ふど
も其部の長を云ふり緒ハ長の本語ふて書紀ふ魁帥
集帥を伊佐袁と訓るも勇長ふり迎れば伴緒ハ其部

の長を云称ふり備令奴五柱神を指て五伴緒と云ハ
石屋戸段ふ見えたる如くふ奴神等各掌れる職有て
其職この部属を帥る長神ふれバふり取要と云れたる
ハ然る事ふて天児屋命ハ中臣の部の長ふり天太玉
命ハ忌部ふ部長ふるふて自餘ハ准ふへて知へし其
一證を挙てむふ古語拾遺ふ太玉命所率神名曰天日
鷲命所以国忌手置帆負命讃岐国忌部祖也彦狭知命紀伊国忌部祖
也櫛明玉命出雲国忌部祖也天目一箇命筑紫両国忌部祖也と有ハ其
五神を率給ふ太玉命の其部男長ふて其被率給ふ五
神ハ其部ふう奴を以て其御天降段の神勅ふ宣太玉

△部を伴と書ハ書と例ハ霊紀神護景雲元年小武蔵国足立郡人大部直不破麻呂ニ見ヘ万葉注釈ニハ伊勢風土記ニハ大伴目臣命を大部目臣命と書ハ異日本霊異記ニハ大部屋栖野古連公者紀伊国名草郡宇治大伊連等祖也と有ル是ハ誤ナルベシ

命率諸部神供奉其職如中天上孫也仍令諸神共陪従と有ハ其照応の文ハ有ル心を著て神代ハ部と部長との差別有ル事を知べき ハ 然して其諸部神ハも各率ル部有て其ハ對へてハ又其部長と成る事ハて又其部ハ下方ハ其部と部長との差別ハ有ル事 ハ 譬へバ太政官ハ其官ハ大臣ハ部長ハて納言以下ハ其率ル部ハ是其官ハ限れる部と部長とハ皆然して其太政官の上ハ中務以下ハ八省ハ皆部ハて太政官ハ部長ハ其省ハて其ハ卿ハ部長ハて其省ハ部ハ其省の内ハ其時ハ其被官輔以下ハ部ハ若て其省ハ部長ハ然ル ハ 諸寮諸司ハ部ハて省ハ部長ハ然ル ハ 諸寮ハて其所属ハ部ハ頭を部長と諸司ハて正を部長と して其所属ハ部ハて如此く一ハ伝て也 ハ 別ても其部と部長とハ各有ル事ハ故ハ其ハ物部之八十伴諸ハ部ハ云ル者ハ

○使配侍ハ私

記ハ曾倍豆波年倍良之年と有ル所古事記ハ文加而天降也と有と記傳十五ニハ支加而ハ久麻理久波幣豆と訓へ久麻理ハ久婆理ハ支ハ字書ハ分也と注て凡て物ハ分ル意ハ用ル字ハ備立の水分神の分注ハ訓ハ立久麻理と有れハ久麻流ハ分ル事ハて此ハ五件長神を其職ニ分ル ハ 配て皇孫御長命の御従ハ加へ給ハ ハ 書紀ハ又以中臣祖云と凡五部神使配侍ハ舌と有ル此配侍字と相照して支ハ必久麻理と訓べき事を知べし 略 と有て意を得て設を成ル可ル先此の配字と同ト意ハて蒙

二ノ一書ニ曰ク天児屋命太玉命ニ乃使二神陪従天忍穂耳尊以降之ニ見ル拾遺ニ曰ク使配侍ト書ル又乃令諸神共陪従ス有テ配侍ト陪従ト異訓ヲ以ケレバ配字ハ天孫ニ令奉給ヘル侍ハ流記第三詔ニ加是仕奉侍ホヒと有ル解ニ侍ヒハ仕奉ルヲ云ク備侍ハ彼岡流ト訓ス備音ヨリ三代実録貞観十二年の宣命ニ今身沈重病天ニ起居失便ス彼部利ト有リト云レ記傳十四ノ四十ノ一ノ彼岡理ハ貴人の御前ニ在ル由ニテ安言の意ニ匍匐在ト云事ヨリ俗言ニ匍匐居ト云フ同ジ万葉二十三ノ十四ノ埴安乃御門之原ニ赤根刺

△太神宮月次祭
神書祭詞ニ大中臣太玉串ヲ陪侍天ト有ハ太神宮式ニ無皆脱先使中臣ノ詔刀ニ有是ヲ以テ侍の言ト跪ノ字ニ相匹ノ見ル可キ所ヲ以テ小念以テ著明ス事ヨリケリ

日之尽鹿自物伊波比伏官鳥玉能暮ニ至者大殿乎振放見乍鶏成伊波比廻雖侍候伍世良比不得者三十三ニ十六社者伊波比并鶏已曾伊波比回礼四時自物伊波比并鶏成伊波比毛等保理恐等仕奉而又三十七十六自物膝折伏ゴと有ヲ以心得ベシ取要と云レシハ恐ル言ハて猶流記第六詔ニ我皇太上天皇大前ニ恐古士物進退匍匐廻侍理白賜比受被賜久者卿等乃問来政乎者加久耶答賜加久耶答賜止云て又同ジ意ヨリて君前ニ恐懼ミ仕奉ヲ匍匐ひ廻ルと云ふ恐れぶ玉部神を各具部の長と分別て天孫の御前ニ陪従て

令供奉給へる由あり備妃倭の言いまし次ありて因
勅皇孫曰云く是吾子孫可主之地也と有かゝきて畏
可畏し皇御孫尊かい君とゝ御在し坐て貴く高く御
在し坐へく奉て詔給ひ五部神かい陪従て前駆在べ
き御命を示し授給へるかて実かい君臣の大義を
天壤と共ふ子と孫との遠裔ゝ也令乱給ひと天
津日継の御基を固立ゝ給へる大御政ありて斉国か
見奉り過す可きふいに非すゝ妖御事か就て傳世一
大義を注し明らめ申せしを見合せて暁る可き者ふ
う漢籍春秋にも以妖事か隆く心を用ひて書る者ふ
るが故ふ舘流と明らむる時の孔子の正名の説の奥
旨も得て知るゝ事ふるを我か皇學ふ仕奉る者い殊

ふ其心用ひ厚かるべし神典の奥旨を究め皇学
の開意を尽す事能はさい者ふり古語を説く事の容
易うらぶる可きふ事を思ふ可きふ○因勅皇孫曰妖かてい天照太神一柱
の大御命の如きを古事記ふ示夫照太御神高木神之
命以云し是以隨白之（隨）科詔曰子番能邇邇芸命妖豊
葦原水穂国者伊所知国言依賜故隨命以可天降と有
て二大神の大御言ふ係れたる実ふ然る事ふるが
以説状かい如く心得有て上百三十ふ任るが如く先
かい天忍穂耳尊ふ妖御言依ふ御在し坐けるを妖ふ
てハ其等の奏請し給へる任ふ二大神より瓊々杵尊
ふ御言有て給ふ御事かい坐せとも汝所知国言依賜

堵

△良按本小豊葦原ヲ作れるハ甚愛なし若し其侍ニ以下を日本国家略文と云書入有ハ知て事なり

ハ二大神より直ふるふハ非す天忍穂耳尊ハ瓊杵尊へ事依し奉らせ給へるより隨命可天降とハ其父大神より事依し奉らせ給ふを二大神の後見て天降し奉らせ給へる由なり○葦原千五百秋瑞穂之地ハ洲国元章歳三ニ書ハ豊葦原有ハ見たるハ其稱ハ国号有しハ非ルとも後の称を始ハ及ばして書されたり者ハ以御天降の御時ハ皇祖天神の号さへ給へる御事申すも更なり故古事記ハハ其以前ハの何所なるハ葦原中国と書されて以段の初ハ天照大神神之命以豊葦原之千秋長五百

之水穂国者我御子正勝吾勝と速日天忍穂耳命之所知国言因賜而天降也と有て其初て起ルる由を今知らしなり天神本紀ハハ以を書せるハ豊葦原之千秋長五百秋長之瑞穂国とも有けれハ古小稚しハ称言為なりしなりけり又略さてハ御紀ハ豊葦原瑞穂国古事記ハ豊葦原水穂国と作し大殿祭詞ハハ以乃天津高御座ハ坐氐天津日嗣乎万千我乃長秋ふ大八洲豊葦原瑞穂之国乎と有ハ万千秋より其意続きて以ハ豊葦原千五百秋之瑞穂国とふ異なるざる者なり傳十四 二十二丁 ハ注るが如く常ハ葦原中国と云

高天原と云ふ對へて天上ふ對へて天下と云程の事
ふて皇国を主と云中ふも大地の全体ふ係れるを以
瑞穂国の嘉号ハ一し大地万国の中より皇国の地を
成一出こ地給ひ置一て坎大八洲国を以て万国の君主と在る国と定こせ給ひ
擢出し天神の斎庭之穂を當御せ奉りて天神御子の
天津日継所知食す可き大御食国と定奉らせ給へる
ありけれハ美一とも何とも云知す甚も尊き国名ふ
ハ有けるハ又坎ふ乾てし外蕃諸戎の国の中ふ淡洲と
云し僅ふ阿自夜と云ふ一大部のを
栗を以て常食と為る国名ふる事皇国を瑞穂国と云
るが如一其余ハ穀食を常と為る事無くて獸肉を
食ひ(性命を僅ふ保つ計の事ふるを皇国の人民ハ
一し上下共ふ穀食を以て常と獸肉を食ふを以て
穢こ為る事ふて甚く国ふ異有ふ等ふ人物ふも清濁有を思ふ可一○葦原ハ豊

葦原と有ふ從ひて神ふ可一坎号の所由ハ傳十四ニ
三十九百十一ふ注るが如一備古事記を始こして何
れふ在し豊葦原と有を以て記傳十三三ふ坎ふ豊て
ふ言の添なるハ始て御子命ふ事依賜ふ詔ふれバ祝
てふう豊ハ国へ係れる祝辞ふる葦ふ係れるふハ非
ずと云れなる実ふ然る言ふるけり神功皇后十三年
御紀大御歌ふ等豫保枳と戊苫陪之訶武保枳と
玖流保之摩苑利盧辞弥企曽と有ハ更ふる祝詞ふ朝
日豊栄登ふ又ハ豊明ふ明生年ふど有ハ本ふ豊饒
ふ一て盛大ふる美ふる万葉一十二ふ渡津海乃豊旗

雲尓十一十四小隠口乃豊泊瀬道者と有ハ雲ふれ道
ふれ云ハ具廣く大ふるを称へたり又豊御酒豊幣帛
ふとい常と云事ふるい本よりかて神楽歌篠ふ佐と
乃波(ハ)仁田(ニヒ)支布利川毛留布由乃典仁止與乃安所比
遠須留可太乃志佐と有ハ豊明節會を豊遊と云(ユウ)拾
遺恵一ふ大嘗會の御禊ふ物見侍りけるふ云と數
多見ー豊(の)御禊の諸人の若ーれ物を思ハけるふ哉と
有ハ謂ゆる河原御禊の御事ふるを常の大祓の比ふ
非ず畏(ミモ)壮観ふる故ふ豊御禊とふ云ふり後拾遺雑五
ふ中納言実成宰相かて五節奉けるふ云と多ーかー

墨

金剛ノ宮殿遊歌
ハ此典戸川比美安
所比須良之ノ有
ハ墨ハ豊果と云
例ふるべし

豊の宮(宮)人指別て灼き日舊を哀れとふ見ー夫木廿九
ふ神風や三角柏の秋の色ふ豊氏人の神さへふ照ふ
ふと云ふ豊(豊)の宮人の大宮人と云ふ如く豊氏人ハ八
十氏人と云ふ如ー万葉十七十四小新年乃賀自米尓
豊乃登之思流須登奈良思豊能敷礼流波夫木十八小
世を祈ふ神の驗ふ豊の年深く積れる眞雪ふふ知ふ
と有ハ年穀の豊饒ふる事小豊年とハ云ふり吹豊と
云ふ言の実ふ就ての大小深致有ふ事ふるを傳四十
丁豊国主尊の御名を説奉ふ因小注せり必吹小見合
ヲ可き事共ふり右の如く豊饒ふる意と盛大ふる実

ことを無ふ言ふりければ俊姫命世記ふ大葦原千五百秋瑞穂国と有ゝ其美相等しうぬ可くこそ（然し）て字書ふ豊大也盛也と注せるかゝ合へり詩（豊）周頌ふ豐年多黍多稌と見え春秋担三年ふ大有年と有る左傳ふ大有年何大豐年也注ふ五穀皆熟為有年大熟大有年也ゝ云ひ公羊傳ふ五穀皆成熟とも見えたり（豊）豊與の美を徴すふ足れり　○千五百秋ハ古事記ふ千秋長五百秋と有ふて心得べし其例ハ大殿祭詞ふ咲乃天津高御座ふ坐氐天津日嗣平万千秋乃長秋ふ大八洲豊葦原瑞穂之国平安国止平元久所知食止言寄奉賜比氐と有ふ万千秋の下ふ長秋の言を添られて幾回ゝ万千秋を遠長ふ數ふる由ふて無際限き意ふり中臣寿詞ふ皇孫尊波高天原仁事始天豊葦原乃瑞穂乃国遠安国止平介之所知食天天津日嗣乃天都高御座仁御坐天天都御膳遠長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁瑞穂平介之久安介久由庭仁所知食止事依志奉与と有ゝ長御膳の遠御膳より係れくバ千秋乃五百秋ハ同ドく無際限き筭ふる事云ゝ更ふり其ふ相応へて大俊根子天皇我天都御膳乃長御膳乃遠御膳止汁仁も實仁も赤丹乃穂仁も所聞食与豊明仁明御坐与天神乃寿詞遠称辞定奉留皇神等千秋五百秋乃相嘗仁相宇豆乃比奉利堅磐常磐仁斎奉利比有ゝ上を承て同筭ふるふり大嘗祭

詞ハ其事を切めて天都御食乃長御食能遠御食奈
皇御孫命乃大嘗聞食年為故ニ皇神等相宇豆乃比奉
区堅磐ニ常磐ニ斎比奉利幸倭御世ニ幸閇奉年依さ氐十
秋五百秋ニ平久安久聞食氐と有を右ハ意を得て見
る時ハ皆一事なりけり（右書の証文を引て）惜記傳十三丁ニ千秋長五百
秋ハ長字ハ下へ流けて長五百秋と訓べく五ハ千秋
之と讀べしと云れたるハ怨る言ハて長五百秋と云
時ハ五百秋を長く重ぬる美と成て実ハ天壤と無
窮き事ハ聞ゆるを此ハ長の言無くして唯千五百
秋とのみ有り此ハ次なる天壤無窮の神勅と本

り相並ひ對ふ所なるハ片方ハ無際限き由を宣
ひ片方ハ千五百秋と限れる數を宣給ハぬ事ハ甚
有ずき御事なりければ其始ハ古事記の如く千秋
長五百秋之とぞ有けむを字を切めて千五百秋とハ
書されしなめり然れども瑞（瑞）穂の出来る其秋ちの秋
の重なる事を云と見る時ハ即天壤與無窮の美ハ帰
へきなるべし記傳ハ書紀神武天皇御巻ハ（の始）所見たる
神代の年數ハ取ていハ万千秋などハ何
許の事なも非るを寿詞と為給へるハ如何と云ハ凡
て神代の事ハ世しを経て語傳なる任ハ其語ハ轉来
ぬるなれば此も命短き人世と成ての語を以傳へ
なるなりと有ハ如何此ハ皇祖天神ハ此国土を依
奉給ひし時の国号なるを神代ハ久遠なる年數を以
て語給へるなれを何と為ていハ人世の短ケなる數ハ換

て傳ふるどい云事の有ひや○瑞穂国古事記ふ水穂国と作れれ
り瑞ハ祥瑞の義ふ取れる字水ハ美豆と云ふ言の同
じきふ就て借れる字ふりけれバ共ふ其義ふ預ず
天武天皇七年御紀ふ忍海造能麻呂献瑞稲五茎一海茎
有枝と有る瑞稲ハ本こり祥瑞を云ふりけれバ扨瑞
穂の義とハ同じ〻ず故扨美豆ふ當へき字を求る
ふ大倭神社注進状ふ御歳神者守護不穀神是以八握
厳稲為神体と云事有り其厳稲ハ伊豆志泥と訓へし
然れバ美豆と伊豆とハ言相通ひて清く麗しき義ふ
るふ又和名抄ふ瑞籬日本紀私記云瑞籬俗云美豆加

政一云以賀岐と有る以賀岐ハ斎垣の義ふりを合せ
て美豆と伊豆と其義の同じき事を暁る可くふひ此
ふ就て美豆と云言の例を試るふ瑞珠盟約章第二ノ一
書ふ瑞ハ坂瓊之曲玉扨第三ノ一書ふ瑞之八坂瓊ふと
有れ玉ふ清く〻て麗美しきを云ふりけれバ厳之八
坂瓊ふて通ゆる古事記玉垣宮段ふ伊所堅之
美豆能小佩者誰解と有れ清く麗ハしき御紐と聞ゆ
れバ伊豆能小佩ふて昆能通ゆる其朝倉段歌ふ
美豆多麻宇岐ふハ厳玉盞盞ふて玉杯の清く麗美し
きを云ふり又古語拾遺ふ瑞殿を古語美豆能美阿良

可と注し又右の瑞蓋を美豆加岐と云変れ清く麗美
しき御殿なり御垣なるなり万葉十三十二に椿垣と
作き木に水枝指と云事の有（を冠辞考に美豆）なり草木の若く麗美
しく栄ゆるを云なり世に若木を美豆木若枝を美
豆枝又若く健やなる人を美豆と斯なと云を思
へ（取要）と云れしは然る事なり具等の美豆々志と伊豆
と見ていふに能叶ふ可き事にして是を以て瑞穂を
ば厳穂の義に見る可し（とか云なり記傳に水穂の水に借字にて美豆
とし書紀に瑞字を書れたれと具意に非（す）ず迷ふ事勿れと云れ具廿三巻に水垣宮の水に
借字（字）なり書紀に水の字を書れたるに更に当らぬ事なり
なを美豆に用ひる字無き故に普く吹瑞字を書習へり）

と云れしに然る言なるべし　穂は記傳十三に稲穂なり書紀に天
照太神云て又勅曰以吾高天原所御（斎庭）之穂亦皆御於吾
児と有る穂と然うと云れしに如し打任せて唯に穂
とのみ云は妖稲穂に限りなる事なり所以に傳十五
二百十十八五十に注し奉るに如く天忍穂耳等と申
奉るは其斎庭之穂を授け御在し坐て天下に降給ふ
ずと雖も己れ天上にして天津日嗣所知食させ給ふ謂
なり其穂は本なる稲穂を申せる又傳卅一四十一に
さに明らめ申せる状に天津彦々火瓊々杵等と申奉
る穂之饒々若等と聞えさする意彦火火出見等と

申奉るハ彦穂と出見等と称奉るゑでを始と為て穂(稲)
を以て神名ハ人名ハ負給へるが多在れども皆
ゑ穂とのゑ云習ハして常と為る事多り備妖瑞穂
みハ豊受大神の御霊を託て天降り奉らせ給ふ委敷
き説布て傳世二千二十六(八百四十九)ハ行るが如く天忍穂
耳尊の御時ハ丹後国ハ降らせ給へり其風土記ハ往
昔豊宇気大神天降て當国之伊去奈子嶽坐之時天通
日女命等請求大神五穀及蚕等之種矣使於淇嶽坂
眞名井濯其水以定水田陸田而悉植(植)矣則其秋垂穎八
握莫之悦甚快也大神見之大歓喜詔阿那迦恵忌(志)而植
弥之田庭然後大神者登高天原矣故(故)田庭也と布て猶
穀を以国ハ植弥す事其大神の御心ハて妖程ハの嘶
瑞穂国と云ふ状ハハ成初なるあり其阿那迦恵志め
御言ハしハ(喜心哉)哉美哉ふとゝも書れたる字ふるハて
ハ美豆又伊豆の言ハ意迦きを思ふ可し然して後ハ
瓊ゝ杵尊の将来らせ給へるハ謂ゆる高千穂宮ハ始
て天下ハ行亘うて瑞穂国と成り天神御子の御食津
国ハハ成定れる者ぞうし記傳ハ上ハ千秋長五百秋
と云ハ妖水穂ハ係なる祝辞ハて秋と云ハ穂ハ係れ
る故ふう長く遠く御子命の妖水穂を所聞食へき国

と云意以て名けたる国号なる事彼大殿祭詞の次同
し祝辞を皇御孫命の大嘗聞食す事に係て云るかて
も知へし大殿祭詞も云状に異なれとも千秋云々
は猶瑞穂心係れり 御皇御國なれる萬の物も 取と云意
れしは思る言なり但後に号けたる国号に非ず皇祖
天神より齋庭の穂を授奉らせ給ふ時に皇御孫尊の
御食津国と為て天津日継の御隆えを祝奉らせ給ひ
て号け聞えさせ給へる御事申すに更なるべし其は
右に已に注るが如く古事記に天忍穂耳命を天
降し奉らせ給ふ記て以て水穂国の号を以て事依し
奉りて給ひ御紀に平国の御政の間の葦原中国と
有て以御天降の所に葦原千五百秋之瑞穂国と書き

也給へるを以て其謂の有る齋庭
之穂に起れる事を暁に可し 若く以瑞穂の起かし
れ興神出生章第十一に一書に保食神の御舟より種々の
穀種始て成出たるを天熊人悉取持去而奉進之于時
天照太神喜之曰是物者則顕見蒼生可食而活之也乃
以粟稗麥豆爲陸田種子以稲爲水田種子因定天邑君
即以其稲種始殖于天狭田及長田其秋垂穎八握莫莫
然甚快也と有に以時彼御誓に依て天忍穂耳命生出
させ御在坐しうに天下の君主と為て天津日継所
知食しめの奉給ひしと所思す程なるに合せて其物共
の成出たりしに顕見蒼生の食て活べき物なと悦

バー御在ー坐て御営田を(為定)為めて殖生ー給ひ普く弘
ゆきせ給ふふ就てハ天邑君を定めさせ給へる是以
国ゆゑも国ゆ造長を置て給ふ始めて皆其天忍穂耳
等の御為ゆ設させ給へる大御政なり若て宝鏡同殆
事ゆ天照大神自新嘗時云て其天狭田長田の稲穂を(の詔布)
斎場ふ於て聞食させ給へる始めて斎庭之穂と云ふ
天津朝廷ふ於ても如此く重て為させ給へる御物ゆ
なを以ふ事依ー奉ーて給へる天神御子の斎場ふ
所聞食させ給ふ(此)瑞穂を為て天下人民ふ令作給へ
国郡ふ造長を置ー て普く天下の日貢を所聞食さる

可ーとあり坐る時ハ天下人民の為ふ令賜給へるふ
非ず(皇)天神御子(ふ)の御為ゆ授給へるゆて天下人民
ゆの(自)天神御子すり(令)令賜給へるる(給)然れハ大地万
国共ふ悉く天神御子の御国なるぬハ非ず(す)と雖も弥
ふ此瑞穂国ふ在とー有ゆる人の限ふ其天津日継の
斎庭之穂を朝夕ふ賜う食て性命を保つ事ゆ有ゆれハ天
神御子ふ露も背奉る時ハ皇祖天神ふ背奉る事と成て
自其身を傷う其体を損ふゆ異なるず天下の瑞穂を
盗喰ひて富貴ふ誇う驕(威)ふ募りて天朝を蔑如ー奉
る時(ふ)ハ天地開闢ふ以降己ふ先祖代と此瑞穂を

食て継承ル子孫ニ至ルまて此瑞穂を食て世を
終る皇恩と国恩とを忘れたり〻者共ハて先祖ニ対
ひても不孝と云へ〻子孫ニ対ひても不慈と云者と
成るを思ハさるこゝ御心と云へ〻況て此瑞穂を日〻ニ
賜ハるゝ外夷を尚び中国を尊ひ限ハ至て人
たるの禽獣ニ劣るくハ性を禽獣ニ得て形ハ
人と生来ぬるゝ〻〻記傳十三四ニ抑皇御国ハ万
の物も事も異国ニ優れる中ニも稲ハ殊ニ今ハ
至りて万国ニ勝れて美たきハ神代ニ深き所由有
る事ニ今世諸人斯る美たき皇国ニ生れて斯る美た

き稲穂を朝暮ニ賜ハるゝ皇神の恩頼をハ思奉
らで由無き蕃国の事のミ思扱ケハ如何ハ
云れたる實ニ瑞穂国の忠臣ハ唯此翁一人のミ有
けり 今一例を示す可し大同本記水取文ニ天神
給久奴水持下天皇太神乃御饌尓八盛献天遺水波天忍水止云天辰国乃水於尓
御水尓八盛献天遺水波天忍水止云天辰国乃水於尓
灌和天献初又御伴奉仕天降奉仕神等八十伴乃諸人
仁も此水斯水平令飲詔天下奉支〻有る此事を中臣
寿詞ニハ天忍雲根神乎天二上仁奉上互神漏岐神漏
美命乃前仁受給波里申仁皇御孫乎乃御膳都水波宇
都志国乃水尓天都水遠加互奉牟止申世止云〻有
て此国中ニて用ふる水の事を皇御孫乎の御膳都水
の由を以て乞奉る〻と云ふ天神〻ハ其水を
賜ハるゝ先皇太神と皇御孫乎の御饌ニ奉る可き
由を宣ひ次ニ御伴神等天下の八十伴の諸人ハ令
賜ハる可き事を宣給へるを乞て天神〻ハ御事依

ム茅ノ八ノ書ニハ生子八十連属ニ有テ八十連属ハ云ヘリ野本ニ云ヘリ

の御物ハ先皇御孫等ハ授ケ給ヒ天下の○吾子孫
人民ハ皇御孫等ヘ令賜給ヘリ
可王之地ハ上ハ天忍穂耳尊ハ保ケ詔フ所ノ故
ハ吾兒（可王之地也）と云布を以ハ其御子護ニ杵尊ハ更ハ問ヘ
セ給フ所ノ物を以て吾子孫と云布ヲ以て古語拾遺ル
以ハ同ジ海宮遊行章第三ノ書ハ吾子孫八十連属雄
略天皇十四年御紀ハ子ニ孫ノ八十（連）聯綿と有ルと
ハ子孫を子ハ孫（生兒ハ字ノ如ク）と也字美能古と訓ル又敏
達天皇十年御紀ハ子孫と書テ下ハ古語云世
兒八十綿連ヘ其訓を注サ此ノ統紀第廿五詔ハ
ル生子乃八十都岐（信）自仕奉叛と見ヘ万葉二十五ノ

ハ殘賣呂夜能安麻能日継等都藝乃久流伎美能御代
ヘ加久佐波奴安加吉許己呂乎殘賣良幣ハ伎波奈
都久之豆都加倍久流於夜能都可佐等許等太豆氏佐
豆気多麻敵流宇美乃古能伊也都藝都伎ハと有て以
ハ祖先ハ對ヘて子孫と云リ又天孫本紀天皇本紀ハ
ハ生ヘ世ヘ子孫と八十聯綿と有リ以ハ依て纂
疏ハ子孫謂子孫也と注ス給ヘリ實ハ恐る
言ヘリ故續紀第一詔ハ高天原ハ事始所遠天皇
御世中今至（麻呂ハ）天皇御子之阿礼坐（年）弥継ヘハ天都
神乃御子隨ヒ天坐神之依之奉之隨茅四詔ハ高天原

△次ある猿田彦神の所ハ天照大神之子所者ゝと有ず古の住ハ了愛たりゝける処れい

興利天降坐ゝ天皇御世ゝ始而中今ハ至麻至ハ天皇御世
ゝと云ゝ第十三部と有を始ゝして右の意味ある詔
詞の多在るハ此ハ是吾子孫可王之地也ゝと詔給へる
如くして天下ハ君王と御在して坐て御世ゝを詔給
へる御旨ハて其原ハ此の神勅を証として詔給へる
御事申ハ更なり但古事記平国の時の詔ハ此葦原
賜之国也ゝと有ハ其天忍穂耳尊を我御子ゝと詔給へる
ゝれとも瓊ゝ杵尊の御天降の所ハ吾御子者天降
之道云ゝと有て此ハ御孫ハ当らせ給へれとも吾御
子ゝと宣へり此るハ傳十六巻五十五丁十八巻十
丁ハ恒ゝ奉るり如く何世の末ゝるとも天神御子ゝと
ゝ日之御子ゝし為奉ゝ御事ハ(て)し在りれば御紀ハ
上ゝ吾兄ハ吾子孫ゝ吾子孫ゝと書ハ(ら)れたるハ却ハ古意ハ
ハ非るハや△此の吾子孫ゝ吾御子之徒しるゝ訓

奉欲ゝ将〇尓皇孫の尓ハ美麻斯ゝ訓べし如此く汝某
ゝ人名の上ハ汝字を置く例ハ傳十四三十ハ注せり
〇就而ハ例の如く伊傳坐氐ゝ訓む事ハ(て)古事記ハ
此豊葦原水穂國者汝所知國言依賜故隨命以可天降
ゝ有ハ當る所ハて即其御天降の御事を促ゝ聞え
させ給へるゝり〇治焉ハ可知看ゝ訓奉る可し即(次)
ハ謂ゆる寶祚を所知食させ御在して坐べき義ゝる事
次ハ寶祚之隆云ゝと有を以曉る可ゝり此御事ハ甚
ゝ深き所以有る御事ハて已ハ傳廿二五十一丁五百十四丁
ハ其大略をハ明ゝめ置ゝとゝ今此ハ當りて其説

△上ハ宝祚ハ言有て其を味る所ゝり

を盡す可ふり紀記ふ被載たる此件の御言依共ふ此
ふ條〻ふ注せれハ今云限ふ非るを其外ふ甚止事無
き傳說共ふむ有ける此治爲ふ相照して讀奉る可き
者ハ孝德天皇大化元年御紀詔ふ惟神惟神者謂隨神道亦自有神道上
也我子應治故寄是以與天地之初君臨之國也と見え
たる惟神我子應治と有ハ此時の大命ふて此ふ葦原
千五百秋之瑞穗國是吾子孫可王之地也と見えたる
と同じ意味ふる中ふ孫ふ惟神の御言ハ〻も君臣の
大義天下の大道の所在ふして其旨廣き事天地の如
く其趣明らけき事日月ふ等同〻く甚も尊く辱き皇

祖天神の恩賜ふて皇御孫尊の珍宝と齋ゆせ給ふ
可き大命ふる事次ふ述るが如く大殿祭詞ふ皇我宇
都御子皇御孫之命此乃天津高御座古堅氏天津日嗣
千万千秋乃長秋ふ大八洲豐葦原瑞穗之国平安国止
平気久所知食止言寄奉賜此氏大祓詞ふ我皇御孫之命波
豐葦原乃水穗之国平安国止平久知所食止事依志奉
仮大殿祭詞ふ皇御孫命波豐葦原乃水穗国平安国止
平久所知食止天下所寄奉志時ふ鎮御魂齋戸祭迄却
宗神詞ふる〻右ふ同じく中臣寿詞ふ皇(御)孫尊波高
天原ふ事始天豐葦原乃瑞穗国遠安国止平久所知食

天天都日嗣乃天津高御座に御坐天天都御膳遠長御膳乃遠御食止千秋乃五百秋に瑞穂遠平かに久安かに久由庭に所知食止事依志奉る志ぞ有ふ以つて事ふ異ゆふ有と雖も皆坎時の皇祖天神の大命ふる事申すも更ふり久續紀第五詔第十四詔第十三詔ふぞふも高天原ふ神留坐皇親神魯岐神魯美命吾孫將知食国天下止與佐斯奉志麻尓尓高天原尓事波自米而四方食國天下乃政を弥高弥廣ふ天日嗣止高御座に坐而とも所見たり右の如く其事がらふ依て云の相違ハ右の事ふぞら其大旨ふ於て異ふる所無きハ皆坎時の一事ふる様ふふ分れたりし者ふ右の中ふ高御座と云事ハ傳卅一巻千卅一巻五百十五

らめ食國と云由ハ傳八巻十丁卅一巻五百十五下ふ委しく注し置たりけれバ今ハ其余の事共を説べきふり偖其惟神を受て次ふ今者隨在天神屬可治平之運使悟斯等而治國治民是先是後と結バせ給へるふ其ふハ隨在天神の字を用ひさせ給へり然して其本注ふ惟神者謂隨神道亦自有神道也と注させ給へるハ惟神と云ふ古語の義を傳給へる古傳の意を明めさせ給へるふり偖此ふ神道と云事二所有る其先ふり右ふ注せる皇祖天神の大命と云ふ皇御孫傳

隨神道とハ直日靈ふ天雲の向伏す限谷瞑の後度る極ふ皇御孫命の大御食国ふ定め て天下ふハ荒振神ふ無くふ伏ぬ人も無く十方御世の末の御世ふて天皇命ハも大御神の御子と坐して天神の御心を大御心と為て神代も今も偏無く神隨守国ふ所知食ける大御国

も天津高御座ふ人々坐奉給ひて天津日継と万千秋の東秋ふ食國天下ふ平ふ所知食ふ御事ふ有りれば と有る事ふ任ふ物ふ給

△神道ヲ隨ヒテ給ヒ給ふ皇即神道ト行ひ給ふ意ナリ

依テ其大命ニ隨ハセ御在リ坐シ　つとも天津日
継と天津高御座ニ大坐して天下ニ君臨して万國を
統御させ御在リ坐す是即惟神ニ云者ハ隨
神道ト是ヲ以テ云事　次ニ隨在天神ノ字を用ひさ
せ給へるを以て見奉り知べし亦自有神道ヲ公其天
神の事依リ奉給へる任ニ其神道ニ隨ハせ御在リ坐
て一向ニ其道ニ依せ御在リ坐て顧させ給ふ所無く
物爲させ給ふ是即神道ヲ云者ハ　現御神ハ同ジ事ナレドモ加ク実ミ神ナリ　天神の御子ノ現人神ニシテ御在ス　以テ即
て無き由を明らかに給ふ事　其字を惟神と書さ
せ給へる以て其一向なる義を暁る可し　此ニ

其正しき徴を立て示さむふ續紀第一詔ニ高天原
ニ事始而遠天皇祖中今至麻呂ニ　天皇御子之阿礼坐年
弥継ニ　ニ大八島國所知次止　天都神乃御子隨世天坐
神之依之奉之隨ヒ天津日嗣高御座之業止　現御神止
大八島國所知倭根子天皇命授賜ヒ負賜布ヒ有ハ皇
祖天皇ヨリ継ヒ先皇持統天皇受傳させ御在リ坐來
らせ給ふ惟神ある隨ヒ　神道ある次ニ小貴伎高伎廣伎厚伎
大命乎受賜利恐坐ニ呉　乃食國天下乎調賜ヒ平賜ヒ
天下乃公民乎恵賜ヒ撫賜ヒ年止世奈隨神所思行佐久詔ヒ
有ハ先皇持統天皇ヨリ新帝文武天皇の受賜リ行ハ

惟神ある其神道を其神道を天下に行ひ御在リ坐シ　隨ヒ御在リ坐シ　此自有神道ヲ云ハ其所に在る事ナリ　即天神

△其皇祖天神の言依一給ひて芝国を

之道ハ外ハ天下ハ道と云ハ無ラ事を也給ふ是謂ハ隨神道ハ取ル道ニ一向ニ神道あり故ハ自有神道と云事ハ符合ル者ハ此ハ天皇の大ハ御上を中ル事ハ也其本を推究む る時ハ傳七五十(九百一)卅一四百七十九丁ハ注るが如く八洲起元章第一一書ハ天神謂伊弉諾尊伊弉冊尊曰有豊葦原千五百秋瑞穂之地宜汝往脩之迺賜天瓊戈と有を古事記ハ於是天神諸命以詔伊邪那岐命伊(弉)邪那美命二柱神修理固成是多陀用幣流之國賜天沼矛而言依賜也と見えて循の言を延て修理固成の四字を(己別て)

(詔給ハ御在ル坐て)成ル是神道と云事の本ある故ハ玉矛の道と

△て右ハ隨神道ハ自有神道ハ神道ハ隨ひて神道を行ひ給ふ即坐神道ハ道ハ ことゞ也く心得ハ活有り 孟子ハ誦堯之言行堯之行是堯命ハ笑と云ふ文意と ハ當て心得へきハ也 引

一ハ世ハ普く云る是ある然れバ道と云者ハ天神の一ハ坐て唯其神道ハ因せ給ふ大命の任ハ物為させ御在日ハ行ハせ給ふ御事業を離ちて外ハ道と云者ハ有る事無くあるに有けれバ今せハ神道と有る類の如き殊更ある物ハ所る事を曉る可一此ハ大ハ似て非ふわけ者ることよ 若て此詔の如くハ皇祖天神より此時ハ當りて惟神の大御命を宣ひ示させ給ハるハ起りて天神の大命の隨ハ物為させ御在一坐て吹ゝも私の御行を交へさせ給ハざる謂ある言義ハ本ハ清音ハて神中在ル云事ハて其行ハせ給ふ中ハ神道在る由ハて謂ゆる自ハ有神道と云ふ意味ある可一然れバ隨在天神又ハ隨神又ハ神隨と云作る如く神の任ハ

の意ある字どもあり続紀の詔ふい 右の如く隨
神所思行と多く續けられれば悉挙ふ及ハず万
葉の歌ふ就て試るふ一十九丁ふ安見知之吾大王神長
柄神佐備世須登芳野川多藝津河内ふ高殿乎高知座
而之有ゝ神道の隨ふ神進爲給ふ美ふ可く又山川
毛因而奉流神長柄多藝津河内ふ船出爲加毋又二十一丁
八隅知之吾大王高照日之皇子神長柄神佐備世須登
大敷爲京乎置而又二十二丁食国乎賣之賜乎登都宮者高
所知武芽神長柄所念奈戸ふと有ゝ神道の隨ふの
義ふ多ハ更ふ二十七丁ふ飛島之淨之宮ふ神隨太布

座而天皇之敷坐国芽又三十五丁定之水穂国乎神隨太布
座而云ゝ常宮跡高之奉而神隨安定座奴又三十六丁久竪
乃天宮ふ神隨神芽座者五十三丁ふ可武奈何良可武佐
備伊麻須久志美多麻伊麻能遠都豆ふ又三十一丁高光日
御朝庭神奈我良愛能盛ふ十七四十一丁ふ可無奈我良跡
奈ふ於婆勢流又四十一丁芽許奈都ふ気受底和多流渡可
無奈我良芽曽十八二十一丁ふ御食国左可延年物能芽可
年奈我良於毛保之賣之豆十九三十九丁ふ神奈我良吾皇
乃天下治賜者又四十二丁安美知之吾大皇乃神奈我良於
毋保之賣志氐二十二十五丁ふ可武奈我良和其大王乃ふ

〇用明天皇前御紀ハ天皇信佛法等神道ニ見えたる事ハ孝徳天皇前御紀ハ其天皇の御事歟

ゞ有を又物ハ那を略きて云り二四十ハ神柄
加幾許貴十六十ハ神柄加見欲賀益十七三十四ハ可奇
加良夜曽許婆多敷刀伎又四十登己奈都ハ見礼弖母
安可受加武賀良奈良之と有る是ハ其十三九ハ蜻
島倭之国者神柄跡言挙ハ為国と有を其並ハ葦原水
穂国者神在隨事挙ハ為国と有を以て其国詰る事
を知へきなり偖此惟神を隨神道と注さ給へるを
詳ハ徴す可き明文有り〇其前御紀ハ天皇ハ御本性を
記中さ仏法ハ等仏法軽神道ハ割注国魂社と見え樹之要皇也
なるハ其又對ハ御事ハ其尊神道ハ隨神道と云ハ等〜〜
ハ軽神道ハ神武天皇成

午年御紀詔ハ今我日神子孫可向日征虜此逆天道也
と有る天道と云ハ天神之道を云事ハ逆ハ軽と此ハ
ていハ通ひて其ハ軽天道と云べし此ハ仏を斥さ給
八異説ハ直ゝ也論
へるを以て逆神道と申す可きが如し故ハ其詔ハ不
若退還示弱礼祭神祇皆是日神之威隨影壓躡と見え
たる礼祭神祇ハ謂ゆる隨神道なり然して皆是日神
之威と云ハ亦自有神道ハて即其任ハ神ハて坐す由ハ
御在
なれハ神道の隨ハ物為さ給ふ事を惟神と申す
ハ本ハて神ハて御在坐す任ハの意ハ用ひたるハ
却ハて意の轉れる者なりけり又皇極天皇前御紀ハ
天皇愼考古道而為政

也と有る古道ハ本
事なるか其順考学ハ礼表記ハ考道以有無失と有ハ
依れる字なるも故ハ加賀閑氏と訓い事なれども順
字ハ當る言無うけれバ二字志多賀比氏と訓べし
て妖の隨神道と事の問きを文を成して書られた
り者なるけるし又詔詞解ハ隨神ハ天皇の御事ハ
ハ何事ハれ神なるなるし云こと申す事ハて天皇ハ現御
神を申して実ハ神ハ坐こが故ハ神なて坐す任ハ物
后給ふ由なりと云れたり然る時ハ惟神と云ハ当然
と云字ハれ当る可うるいを近頃光荘の自然又ハ無
為なるの字ハ当て説を成せる類ハ故其前御記ハ天
正史を読い事の跡きハ依れるなり

皇云て召集群臣盟曰と有て帝道唯一と詔給ひて下
ハ自今以後君無二政臣無貳朝と云ハ對へさせ給へ
の其帝道と云ハ即神道と申す事ハて古語拾遺ハ謂
ゆる天照居神体の御事ハて神道即帝道ハ天二

有ハ非るが故ハ唯一と詔給へるなて惟神の字を
用ひさせ給へるを因ハ御意味なる者なり然して君
無二政と云ハ惟神なる神道ハ隨ハて御在し坐て唯
帝道のを脩めるて御在し坐いて云る御趣ハなり
有ける妖ハ相応へなる天ハ右ハ引る惟神惟神者謂隨神道亦
自有神道也我子応治故寄是以興天地之初君臨之国せと
有る是ハて妖の御事依の時の大命のを有ける妖
ハ吾子孫可王之地せと有を古事記ハハ汝所知国言
依賜と有て天下ハ君主と坐て国土を所知食ませ御
在し坐す夫津日嗣高御座の大御業ハし唯惟神ハ

る帝道唯一のミ有る趣あり若て其志治ハ坏の治為
と一ふ為て坏を体と為て其用ハ修理固成の四あり
事傳七十九廿九の巻ニハ注せる事石ハ注るゝ如し
然れバ其御事依の御事共ハ就て坏治為す体用をゝ
う事の序ふれハ云て云ふ坏ハ葦原千五百秋之瑞穂
国是吾子孫可王之地也又茅二ノ書ハ天照太神云と
又勅曰以吾高天原所御斎庭之穂亦當御於吾児ふど
見えたるゝ右ハ引る大殿祭詞中臣寿詞等ハ見え
たる筋の事ふ坏ハ田園を開墾と給ふ農業を起し
給ひ租税調庸を令貢給ふ太御政ハ御在坐て天津

日嗣を所知食す大御業ハ在ける坏ハ勝れる連
事ハ御在坐ざるふり即出雲神賀詞ハ謂ゆる現事
是ふり若て理と云ハ茅二ノ書ハ高皇産霊尊因勅曰
吾則起樹天津神高及天津磐境等為吾孫奉斎矣云と
是所天照太神手持宝鏡授天忍穂耳尊命祝之曰吾児
視坏宝鏡当猶視吾可与同床共殿以為斎鏡と有ハ神
祇を治奉ると給ふ道ハて坏を以て天下人民を治め
給ふ天津高御座り大御業を申奉れるふれハ即
其詞ハ謂ゆる顕事是ふり其現事顕事の所以ハ傳卅
一六百十六丁六百五十四丁 卅三十百丁ハ注せるを見へきふり

宮内省図書寮文庫

次に固と云ハ以て又以中臣上祖天児屋命忌部上祖
太玉命猿女上祖天鈿女命鏡作上祖石凝姥命玉作上
祖玉屋命凡五都神使配倚焉と有る類ハて各其陪従
の神等ハ其職掌有て固執る所を以て今仕奉給へる
ハて以ハ修の用あり次に成と云ハ葦二ノ書に其天宣下
汝天児屋命太玉命降於葦原中国亦為吾孫奉斎焉乃使二
神陪従天忍穂耳尊以降之又ハ復勅天児屋命太玉命
惟ハ二神亦同侍殿内善為防護と有る如きハ其成す
可き事を令成て使給ふ由ハて成ハ理の用あり事を
細う小云時ハ限り無き事ハ在れども以ハ摩たる

宮内省図書寮文庫

国立公文書館
National Archives of Japan